

【小説部門・優秀賞】

無用の感性とその末路について

愛知県立愛知商業高等学校第2学年 中尾 ひより

「さくらって知ってる？」

試験の帰り道、宮田が何の前触れもなくたずねてきた。

「エキストラみたいな奴らのことか。」

わりと真剣に答えたのだが、一笑された。

「そうじゃなくて、植物のだよ。大きくて、何年も生きる樹なんだけど、四月には綺麗な花を咲かせるんだ。」

「食べられるのか？」

「うん。あんまり腹に溜まらないらしいけれど。主に観賞用だよ。僕は去年見に行ったけれど、本当に感動する美しさだ。」

食に関わらない植物には明るくない。というか、今のご時世、知っている奴の方が珍しいんじゃないのか。

「昔はこの辺りにも、そこら中に街路樹として植えられてたらしいんだけど、今は隣町の方にまばらにあるだけ。食料にならないから伐採されたんだね。」

「お前って、いろんなこと知ってるよな。そんなこと、試験にも出ないのに。」

「六歳の時の試験範囲だったよ。」

まじか。

「受かってるといいな。」

宮田はマフラーを結び直し、呟く。

「お前なら受かるどころか、また満点一位だろ。余裕そうだったじゃん。最後の方、時間余ってずっと見直ししてたの、知ってるんだからな。いいよなあ、頭いい奴は。」

肩を小突いてやる。宮田は困ったような顔で笑った。

生存試験。生試ともいわれる。数十年前に全世界で始まったもので、年齢が六の倍数になる全国の間人が、一斉に試験を受けるのだ。内容は筆記と実技。筆記試験は年齢によって分野が変わり、実技はスポーツに限らず、家庭科や芸術など多岐にわたる。筆記、実技両方七十点以上で合格となる。

この試験で問われるのは、その名の通り生存する資格だ。不合格になれば死ななくてはならない。

百年ほど前、異常気象や疫病、人口爆発が重なり、世界的な食料難が起こった。自国を守ろうと貿易はストップされ、食料自給率の低い日本は大飢饉を迎えた。輸出する側だった外国も、結局は食料を奪い合う暴動が国内で勃発し、まさに世紀末の有り様だったそうだ。

そこで各国の首脳間で考案され、苦渋の決断の末に採択、実施されたのが生存試験だった。当初は反対意見もあったが、人間同士の愛情は目前の飢餓に勝てなかったそうだ。それからずっと、試験は続けられている。

生きること資格を設け、良質な人間だけを残せるように。

俺は試験対策の問題集を閉じた。『生試の成り立ち』は、十八歳の部の分野だ。今回俺たちが受けた生試にも、今の文章が出題された。学校の授業でもやったし、教科書も読み込んだから、ばっちり解けた。宮田を家に誘い、さっそく自己採点してみたが、合格できそうだ。実技も芸術分野以外は自信がある。

「命がつながりました。」

俺はあぐらを解き、仰向けに床に倒れこんだ。採点そっちのけで読書にふける宮田の膝を、机の下で蹴る。反撃に、足の親指に爪を立てられた。

「いてえ」

上体を起こす。宮田は知らん顔で本のページをめくった。

宮田は頭がいい。普段の学校の考査はもちろん、生試の筆記も過去二回とも満点合格という、俺に言わせればガリ勉だ。

生試に合格するのは、日本で教育を受けていればそれほど難しくないが、満点は本当に稀だ。三問くらい、どんな対策問題にも載っていない、授業でも習わないような問いが出題される。それを解けたのは全国で四人。そのうちの一人が宮田だった。生試の結果は生存資格だけでなく、将来の進路にも関わる。それも本当にトップクラスの成績をおさめた奴だけだが、宮田のことだ、どうせ今回も好成绩のはずだ。これから、政府から直々に手紙が来て、コーキューカンリョウとかになるのだろう。実際、前回の生試の後、宮田の家に政府関係の人が訪れたことを知っている。

机に肘をついて、宮田の本を見る。表紙には『現代日本』とあった。

「お前、読書ジャンキーだよな。」

「面白いんだよ。知らないことが色々載ってるし。」

「金のかかる趣味だよなあ。本って今時高いだろ。」

「大飢饉時代に食べられたり、暴動で燃えたりしたらしいからね。生試の用紙に紙を回すから、ほとんど刷られることも無くなって。」

まあ、読んでも意味ないもんな。小説とか古典とか、そういう文章は生存試験で出題されない。

俺はテレビをつけた。天気予報や、今週配給される食料がニュースで放送されている。

「あ、今週ジャガイモ多い。カレー食べれるかな。」

「さあ……」

宮田は生返事をして、本を閉じた。

「大飢饉時代より前の人たちが羨ましいよなあ。配給の品目を気にせずに好きな物を食べられたんだろ。」

こんな時代だが、俺は食べるのが好きだ。

「でも、基本的な暮らしは、飢饉より以前の人たちと今の僕たちと、あまり変わらないらしいよ。」

『現代日本』を指差す。その『現代』は何年前の話なのか。

「本当に苦しかったのは飢饉時代だけだったんだ。初期の生存試験は今よりずっと判定が厳しかったから、義務教育を受けられない人たちや、ハンディを持つ人たちはほとんど亡くなって、今はもう、生試なんかなくても充分、皆生きていけるんだ。」

惰性だよ。と、宮田は言った。珍しく、棘のある言い方だった。

「でも今もまだ異常気象は頻繁にくるし、間引きしとかなないと危ないんだろ？」

「だったらこんな不自由のない暮らしを諦める方が先だ。君、空腹を感じたことないだろう。」

確かに配給される食材はいつもたっぷりあった。冷蔵庫があるから保存もできる。

「生試なんて本当はもう、やらなくてもいいはずなんだ。間引きしないと危ないのは、僕らの今の生活であって、僕たちの命じゃないんだ。」

宮田はしきりに本の表紙を撫でた。俺は宮田の丸まった背を叩いた。

「なあ、色々考えすぎだって。とりあえず生試さえ受かっておけば、生きてられるわけだし。それにそんなこと言ったって、どうしようもないだろ。意味無いよ。」

宮田は俺の手を払いのけ、テーブルを叩いた。コップが倒れ、水が広がる。

「皆、」

宮田はコップを掴んで、あろうことか投げつけてきた。

「皆そうやって言うんだ。意味がないって。桜もマグリットも夏目漱石も、どうせ生存試験に関係ないって捨てるんだ。僕らは試験のために生きてるのか。それこそ意味なんてないだろ。」

「おい、落ち着けて。漱石とかはさすがに知ってるよ。中学で習ったろ。『坊っちゃん』とか。」

うろ覚えの題名を引っ張り出し、なんとかなだめようとする。宮田は黙り込んだ。怒りが萎んでいくのが分かる。俺も力が抜けた。腰を抜かしているかもしれない。

「……なら君は、どう思ったんだ。それを読んで。」

完全に不意打ちできた質問に、俺は間抜けな声が漏れた。宮田は立ち上がり、見下ろしてくる。

「どうって……」

正直に言えば、なんとも思っていない。なにも感じなかった。だって、そんなことは、

生存試験に出ないから。生きていくうえで関係ないから。普通にしていれば誰も死ななくて済むし、死んだところで、知ったことではない。皆そうであるはずだ。宮田が無駄に悩んでいるだけだ。

答えられずにいる俺を一笑すると、宮田は本をカバンに詰め、ハンカチで机上の水をふき取ると、静かに家を出て行った。

一か月後の、ある朝。家に生存試験の結果が届いた。合格していた。いつも通りの平均的な点数で。親は一安心といった顔で俺を学校へ送り出す。俺は携帯で宮田に合格報告をした。

宮田はあれだけ怒鳴っておいて、翌日には普通に話しかけてきた。こっちは絶交を覚悟しただけに、肩透かしを食らった気分だ。

きっと今回の合格も、喜んでくれる。

でも、宮田は学校に来なかった。今まで皆勤だったのに、今日に限って休んだ。携帯の返信も無かった。

嫌な予感がした。宮田に限ってそんなことは絶対にないはずなのに。

終業のチャイムと同時に走り出した。向かうところは決まっている。

宮田の家に着くと、目を真っ赤に腫らした宮田のおばさんが出てきて、中に通してくれた。久しぶりに来た宮田家は、以前よりずっと静かに感じた。

背中を丸め、居間のソファに座りこんだおばさんは、悲しそうだったが、それだけのようだった。怒りとか、そういうのは無さそうだった。

階段を上がり、宮田自身の部屋へ入る。何度か遊びに来たここには、相変わらずよく分からない小説とか、画集がある。その中に件の、夏目漱石の『坊っちゃん』があるのを見つけた。表紙が擦り切れていて、押し花の葉が挟んであった。

生試の当日を思い出す。俺の隣で試験を受けていた宮田。その手が動いていないのは見直したと思っていた。あいつは最初から、鉛筆を触ってすらいなかったのだ。

日に焼けた本の表紙を撫でる。

「お前なら、意味のないことを止めさせることも、できたんじゃないのか。」

生試への反対意見は、今も皆無なわけではない。ただ、表面化していないだけだ。覆っている方が都合がいいし、何も考えなくていいから。

俺は下に本を叩きつけた。

葉の挟まったページが開いた。開き癖がついていたのだろう。登場人物の中の一人に、鉛筆で線が引かれていて、小さく、『僕』と、書かれていた。